最後の一葉

オー・ヘンリー
訳：遥　弥生

本作品は一九〇七年に出版されており、著者死亡から一〇〇年が経過しているためパブリック・ドメインに指定されていますが、これは原文の当該箇所がドイツ語訛りで綴られていることに倣ったものであり、特定の地域・文化圏を貶める意図はございません。

　ワシントン＝スクエアの西の小さな一角は、通りがでたらめに走っていて、「プレイス」という単位に小さく分けられていた。「プレイス」は奇妙な角やカーブを描いており、一つの通りが自分自身と一度や二度交差しているのはざらである。むかし、ある芸術家がこの通りに価値ある使い道を見出した。まあ、取り立て屋が絵具やら紙やらカンヴァスやらの請求書を持って、この道路を往来してみても、ふいにもとの場所に戻ってきてしまったことに気づいて、しかも一セントの代金も支払われていない、となることであろう。

　それゆえ、古ぼけたこのグリニッジ＝ヴィレッジには、まもなく芸術人間がぶらぶらやってきて、いろいろ探し求めるようになった。北向きの窓や一八世紀ガラス、オランダ風の屋根裏、それに安い家賃を。つづいてシロメ製のマグカップいくつかとコンロ付き卓上鍋一つか二つが六番街から持ち込まれて、「コロニー」が出来上がった。

　ずんぐりとした三階建てのレンガ家の一番上がスーとジョンシーの工房だった。ジョンシー、というのはジョアンナの愛称である。スーのほうはメインの、ジョンシーのほうはカリフォルニアの出身であった。八番街のレストラン「デルモニコス」で定食を食べているときに出会い、芸術と、加えてチコリーのサラダの味付けとビショップスリーブの服の好みが合って、一緒の工房を持つにまで至ったのである。

　それが五月のことであった。十一月になると、医者が肺炎と呼ぶ、冷たい闖入者がコロニーを徘徊して、あちこちの人にその冷たい指で触れて回った。東のほうではこの破壊者は大仰に行進しては、罹患者たちを云十人となぶってきたというのに、狭く苔むした「プレイス」の迷路のほうは、緩慢な歩みで通過してゆくのであった。

「肺炎氏」はいわゆる騎士道精神にのっとった老紳士などではなかった。カリフォルニアのそよ風で血を薄めた若い娘さんが、連戦して息も絶え絶えの老いぼれの餌食になることは到底ありえないはずであった。が、ジョンシーはやられてしまった。ほとんど動かず、ペンキ塗の鉄の寝台のうえに寝たきりになり、小さなオランダ風の窓硝子から、煉瓦造りの隣家のつまらない壁を眺めるだけになってしまったのである。

＊

ある朝、医師は慌ただしくスーを廊下に連れ出すと、毛むくじゃらで灰色の眉を片方だけひくつかせた。
「見込みは……そうだな、十分の一だね」
医師は体温計の水銀を振りつつ言った。
「それにこの見込みは生きたいと思うかにかかっているんでね。こうやって葬儀屋に味方するみたいなことをされるとねぇ、どんな治療だって無意味になってくるんですよ。お宅のお嬢さんも、自分で回復しないもんだと思い込んじゃってるし。何か関心が持てることとかないわけ？」
「……いつかナポリ湾の絵が描きたいと」
スーが言った。
「絵って……あのねえ！　もっと考えるもんがあるでしょう……ほら、男とかさあ」
「男ですって？」
スーは口琴を鳴らしたような鼻声を出した。
「男なんてそんな……ともかく先生、ないです、そういうのは」
「ああそう、そこが駄目なとこですよ、それじゃあ」
医師が言った。
「技術でどうにかなることは全部やりますよ、やれるだけね。でも患者が葬送行進に参列する馬車を数えるような真似をし始めるとねぇ、薬の効き目も半減するというもんなんですよ。あのお嬢さんが今度の冬のコートの袖の流行について質問の一つでもする程度にしてくれれば、五分の一の見込みは約束できますよ、十分の一じゃなくてね」

＊

医師が帰ると、スーは仕事部屋に入り、涙で日本製の紙ナプキンがぐちゃぐちゃになるまで泣いた。それから画板を持ち、ラグタイム音楽の口笛を吹きながら、胸を張ってジョンシーの部屋に向かった。
ジョンシーはピクリとも動かずに横になっていた。顔は窓の方に向いていた。スーは口笛を止めた。ジョンシーが眠っていると思ったのである。
スーは画板を置くと、インクをつけたペンを動かしはじめた。雑誌小説のイラスト描きであった。年若い芸術家は「芸術道」を踏み固めるために、やはり「文学道」を踏み固めんとする年若い作家の書く雑誌小説に挿絵を描いてやらねばならぬのである。
スーが主人公のアイダホ＝カウボーイの絵の上に優雅な乗馬ショー用のズボンと単眼鏡をスケッチしていたときであった。低い音が幾度か繰り返されるのが聴こえた。彼女は素早くベッド脇に近づいた。
ジョンシーの目が見開かれていた。窓の外を見やりながら、繰り返し、繰り返し何かを数えている。
「十二」
ジョンシーは言った。
すぐ後で「十一」それから「十」、「九」それから「八」、「七」とこれはほとんど同時であった。
スーは注意深く窓の外を見やった。数えるものなどあるのだろうか？　だがせいぜい、何もなく閑散とした庭と、二十フィート向うに煉瓦の家のつまらない壁がある だけであった。たいそうよぼよぼのツタが、根元が節くれだって腐り果てた状態で、煉瓦壁の中ほどまで這いあがっている。秋の冷たい風が葉をツタから叩き落としてしまったせいで、骨格だけとりのこされた枝が、ほとんど裸同然になりながら、ぼろぼろの煉瓦壁にようやくしがみついているのであった。
「ねえ、何してるの」
スーは尋ねた。
「六」
ジョンシーは囁き同然に言った。
「落ちるのがどんどん速くなってる。三日前は百近くあったの。数えてると頭痛がしてくるぐらいだった。それが今じゃ簡単。また一枚落ちてゆく。これでもう残り五」
「五って何？　教えてよ、あたしとあんたの仲じゃない」
「葉っぱ。あのツタの。最後の一葉が落ちるとき私も死ぬ。三日間ぐらいかな。先生から聞いてない？」
「聞かないわよ、そんなバカげたこと」
スーは笑い飛ばした。
「よぼよぼのツタの葉とあんたの健康に何の関係があるのよ？　それにあんたあのツタが大好きだったじゃない、まったく酷い事言うんだから。おどけるのはよして。そうねえ、今朝の先生の話によれば、すぐに良くなる見込みは、そのまま言うと……一分の十ですって！　ほら、ニューヨークにいて市街電車に乗るとか、歩いてたら新

しいビルの横を通るとか、そのぐらいの見込みよ。ほらちょっとはスープを飲んで、スージーさんを仕事に戻らせて頂戴。そしたらスージーさんは編集に売り込んで、病気のこの子にポートワインを、腹ペコの自分にポークチョップを買うんだから」
「ワインはもういらないのよ」
ジョンシーは目を窓の外に向けたまま言った。
「また一枚。スープももういいの。葉はあと四枚。暗くなる前に最後の一葉が落ちるところが見たいな。そうして私も一緒に死ぬの」
「ジョンシー、ねえ、」
スーはジョンシーの上にかがみ込んだ。
「約束してくれる？　目を閉じるって。仕事が終わるまで窓の外は見ないって。明日までにこの絵を仕上げなくちゃならないの。明かりが要るのよ。それさえなければこの窓には日除けを下ろすところだけど」
「別の部屋で描けばいいのに」
ジョンシーは冷たくそう言い放った。
「傍に居たいの」
スーは言った。
「それにあんな馬鹿げたツタの葉なんか見ないでほしいし」
「終わったら教えてよ」
ジョンシーは目を閉じ、倒れた像のように白い顔で静かに横たわった。
「最後の一葉が落ちるのを見たいから。疲れたのよ、待つのも。考えるのも。抱えてるもの全部から楽になって、落ちていきたいの、ひらひらって、あの哀れなぼろぼろの葉っぱの一枚みたいに」
「もう寝て」
スーは言った。
「ベアーマンさんのとこに行って、年老いた穴倉の隠遁者のモデルになってもらわなくちゃいけないの。一分とかからないわ。戻るまで動かないで頂戴」

＊

ベアーマン老人というのは下の一階に住む画家である。六十過ぎで、ミケランジェロの描いたモーセのようなうねる顎鬚が、サテュロスのような人でなしの顔面から、インプのような痩せぎすの図体に向けて垂れ下がっている。ベアーマン老人は芸術家くずれであった。四十年必死に絵筆を動しつづけたが、ついに愛しの芸術様のローブの裾にすら触れられなかった。いつも名作を描いてやろうとしているが、手を付けたためしがなく、ときどきの広告宣伝用の落書きのほかは、もう何年も一切絵を描いていない。プロのモデルに金を払えない、コロニーの若い芸術家向けにモデルをやって僅かな稼ぎを得ている。ジンを呑みまくると、いつか描くはずの傑作のことを未だに語るが、それ以外の時は気難しやの小老人で、他人の軟弱さをいやな感じに嘲っては、自らをして階上の工房に住む二人の年若い芸術家を守るマスチフ種の番犬であると任じているのであった。
スーが階下の薄暗いねぐらに向かうと、ベアーマンはそこでジン特有の杜松香料の強烈な臭いを放っているところであった。部屋の片隅にはイーゼルのうえに、名作のはじめの一筆を待ち続けて二十五年間のまっさらなカンヴァスが置かれている。スーはベアーマンに、ジョンシーの例の空想のこと、ジョンシーの生への執着が今以上に弱くなって、まるで葉のようにたやすくはかなく、ふわりと逝ってしまうのを、自分がいかに恐れているかを話した。
ベアーマン老人は赤らんだ目からわかりやすく涙をこぼしながら、そんなのは馬鹿げた想像だと侮蔑と嘲笑の声を上げたのであった。
「なんだど？」
ベアーマンは叫んだ。
「馬鹿げだツタがら葉さ落ぢで死ぬような間抜けがいるものが。ほだなこどは聞いだだめすがねえ。やぁだ、おめのだめに間抜けな引ぎごもりのモデルなどやらね。なすてほだな馬鹿なごどあの子の頭さ考えさしぇるのが？あわれなぢびっ子ジョンシーさ」
「ひどく病んで、弱ってるからよ」
スーは言った。
「熱のせいで陰鬱になっておかしな空想にとりつかれてるんだから。ええ、いいわベアーマンさん、モデルなんてやってくれなくても結構。この憎たらしい老いぼれの……老いぼれ法螺吹きオカマ野郎め」
「おめのほうごそ女でねが！」
ベアーマンは吠えた。
「誰がモデルやんねど言っだ？　部屋さ帰れ、ついて行っでやっから。ずっどモデルやる用意ができでるど言うべど思ってだどごだ。ああ、こごはジョンスーぢゃんのような良い子が病気で寝ででる良い場所でねぇ。いづがおらが傑作描いで、みんなでこご出てゆぐんだ。ああ、そうだども」

＊

上にあがるとジョンシーは眠っていた。スーは日除け

を下まで下ろすと、ベアーマンを隣室に移動させた。二人は隣室に入ると、恐る恐る窓の外のツタを見つめ、それから黙って一瞬だけ互いに目を合わせた。執拗な、冷たい雨がみぞれ交じりに降っていた。ベアーマンは古びた青いシャツを着て、穴倉の隠遁者のごとく、岩に見立てた逆さの鍋の上に腰を下ろした。

＊

翌朝、スーが小一時間の眠りから目覚めると、ジョンシーは気だるげに見開かれた目を、下りきった緑の日除けのほうに向けていた。

「これ上げてよ。見たいの」

ジョンシーはささやき声でせがんだ。

スーはしぶしぶそれに従った。

しかしどうであろう。打ち付けるような雨と猛々しい防風が一晩中続いたあとで、煉瓦の壁にはなお持ちこたえた一枚のツタの葉があった。ツタに残った最後の一葉である。付け根は依然緑に深く色づいて、ぎざぎざの縁こそ黄色く腐朽しかけているが、それは敢然と、地上二十フィートほどの高さの枝からぶらさがっているのであった。

「最後の一葉だわ」

ジョンシーは言った。

「夜のうちにきっと落ちてしまうと思っていたのに。風の音を聞いたのに。今日中に落ちて、きっと私も死んで」

「ねえ、ねえってば！」

スーは疲れ切った顔を枕のほうに向けた。

「あたしのことを考えてよ、自分のことがダメっていうなら。あたしはどうすればいいっていうの？」

だがジョンシーは答えなかった。神秘の果てしない旅路に備える魂ほど、この世に痛ましいものはない。空想がジョンシーを強くとらえてゆくほどに、彼女を友情と地上に縛り付ける係累が一つ一つ失われてゆくかのようであった。

昼が過ぎて、黄昏時になっても、見やるたびこの唯一のツタの葉は壁の枝にしがみついていた。夜になると、北風が再び吹き荒れる中、雨はずっと窓を打ち、低いオランダ風のひさしをつたってボタボタと落ち続けた。

＊

朝になって明るくなると、ジョンシーは無慈悲にも日除けを上げるよう命じた。

ツタの葉はまだそこにある。

ジョンシーは横たわったまま、長い事それを見つめていた。それから、ちょうどガスストーブのうえでチキンスープをかき混ぜていたスーに呼びかけた。

「私、悪い子だったわ、スージー」

ジョンシーは言った。

「どうしてかあの最後の一葉がずっとあそこにとどまって、自分がどんなにひどいことをしていたか、私に教えてくれた。死にたいと思うのは罪悪なのね。スープを少し持ってきてくれる？　それにポートワインの入ったミルクと、それと……、ううん。まずは手鏡を持ってきて、それから枕をいくつかここに押し込んで。身体を起こして、あなたが料理するのを眺めているから」

そして一時間後、彼女は言った。

「スージー、私いつか、ナポリ湾の絵が描きたい」

＊

午後になって医師がやって来た。帰り際、スーもことわって廊下に出た。

「見込みがありますよ」

医師は震えるスーのか細い手を取った。

「いやあ、あなたの看病のおかげですなぁ。そういえば階下に別の患者がいましてね。ベアーマンという名前の……芸術家くずれですよ、見たところやっぱり肺炎なんです。あれは年を食ってるし貧弱だし、それに症状もひどい。ダメですよあれは。でもまあ、今日病院に移るから少しは楽になるかね」

＊

翌日になると、医師はスーに言った。

「峠は越えましたよ。お二人の勝ちですな。あとは栄養と看病だけです、ええ」

＊

その日の午後、スーがベッドのところに行くと、ジョンシーは横になったまま、真っ青のまったく使いようのない毛糸の肩掛けを満足げに編んでいるところであった。スーは片腕で彼女を、枕と何もかもと一緒に抱きしめた。

「言わなきゃならないことがあるの、大好きなあんたに」

スーは言った。

「ベアーマンさんが今日病院で、肺炎で亡くなったわ。病気だったのはたったの二日。一昨日の朝、階下の部屋で痛みに動けなくなっているところを管理人さんが見つ

けた。靴も服もぐっしょり濡れて氷みたいに冷たくなってて、あんな恐ろしい夜にどこにいたのか見当もつかないって。それから見つかったのが、まだ明かりの灯ったランタンと、もとの場所から引っ張り出されたハシゴと、散乱した絵筆がいくつかと、緑と黄の色を混ぜ合わせるのに使ったパレットと、それと……。窓の外を見て、ねえ、あの壁に残ったツタの最後の一葉を。不思議に思ったはずよ？　風が吹いているというのになびきも動きもしないのはどうしてかって。ええ、それはね、あれがベアーマンの傑作だからよ……あの人が葉を描いたんだわ、最後の一葉が落ちた夜に」